

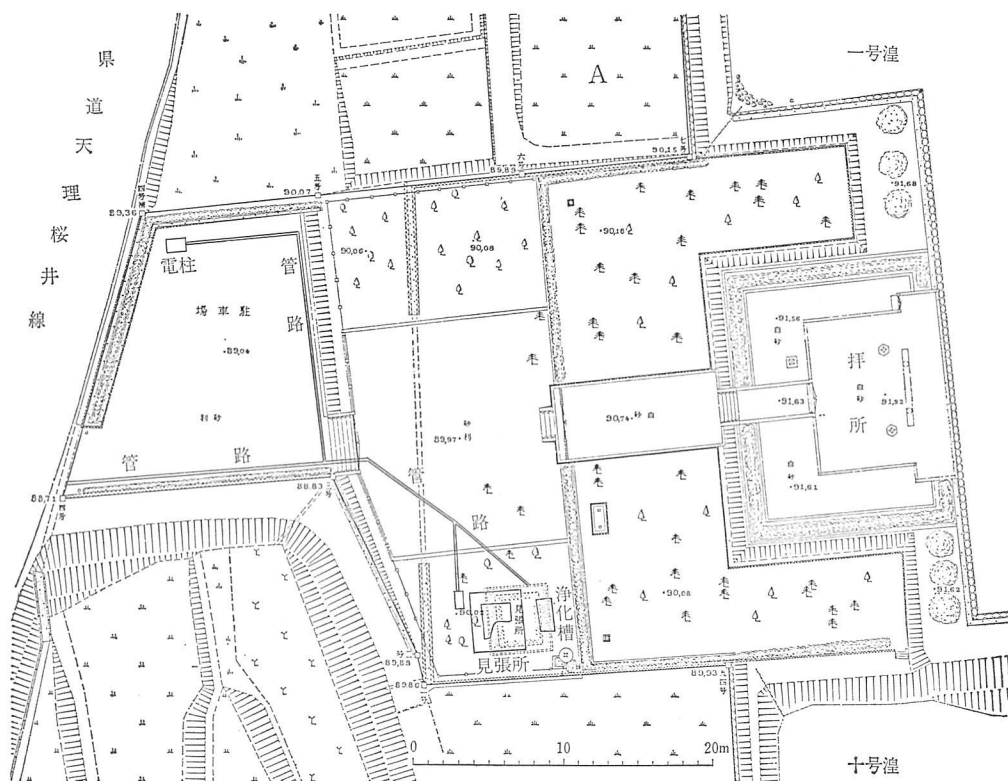
平成四
年度

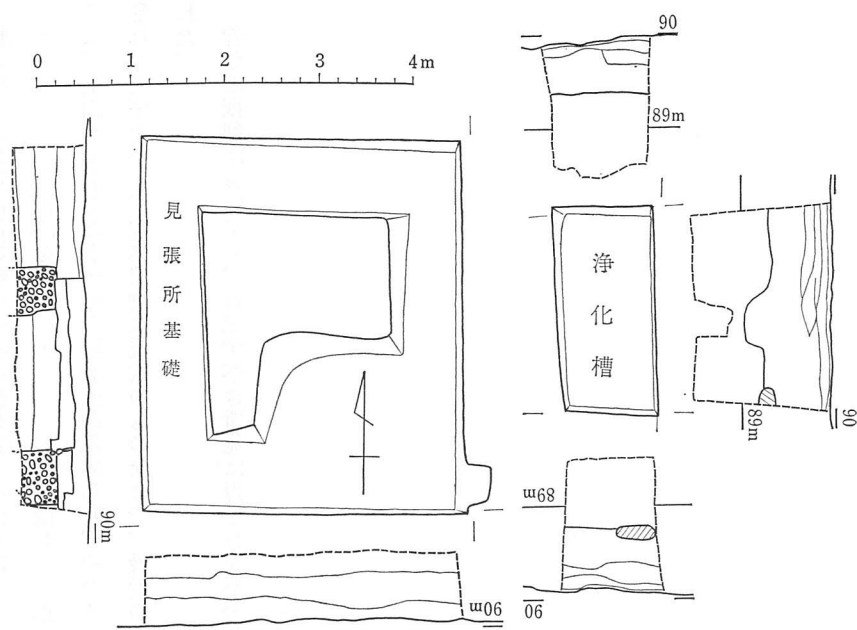
山辺道上陵見張所改築工事に伴う立会調査

景行天皇の山辺道上陵は、奈良盆地の東山麓天理市渋谷町に所在し、西に伸びる尾根のふくらみを利用して築造された前方後円墳である。前方部正面外堤の中央拝所で見張所の改築と付帯工事が行なわれたので、調査した(第26図)。この付近は、概して北東から南西に傾斜する自然地形のところで、これを改変して築堤等が施されているようである。細かく見ると、正面外堤の北半の現状は、第一遡の幅の狭い外堤の外側が一段低くなった窪地(同図A)となっている。窪地の西側内法面は、墳丘前方部正面とほぼ平行に走っていて、本来の外堤は、この窪地西側の一段高い部分である可能性が考えられる。この想定が正しければ、見張所改築予定地は、本来の外堤の法肩あたりに位置するようである。また、現在の駐車場等の部分は、もと段々に造成された水田であったところで、昭和三十五年の県道天理桜井線の改良工事にもなつて新たに陵墓地に取込み、埋立てたものである。

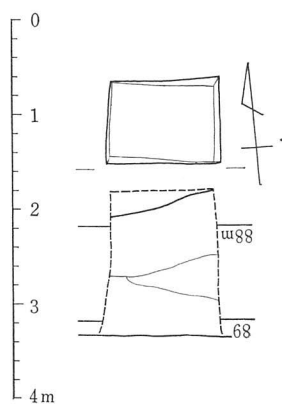
調査は、平成四年七月二十九日～九月二十五日の間、見張所の基礎・浄化槽・管路(地中電線・水道管理設)の掘削工に立会って行なつた。その結果、新しい時期の遺構・遺物が出土したが、原初の遺構は認められなかったので、予定通り施工した。

(一) 見張所基礎(第27図)





第27図 山辺道上陵見張所基礎・浄化槽埋設墳の平面および断面 (1/80)



第28図 山辺道上陵電柱掘方の平面および断面 (1/80)

み出していた。また南壁には、花崗岩の霽爛土上に径四〇センチの平たい河原石が据えられたような状態で検出された。白灰色粘土層から上層は、明らかに盛土である。

見張所基礎の東隣りに約一・二メートル×二・三メートルの範囲に浄化槽を埋設するために深さ一・五メートル掘削した。墳の下半は、朝和層を構成する花崗岩の霽爛土で、ブロック状にも見えて盛土のようでもあるが、判然とせず、山裾の二次堆積土かも知れない。この土を掘り込んだ溝状の遺構が東西方向に走り、その底床には直径三〇五センチ前後の樹枝が敷きつめられ、その上は白灰色粘質土で覆われている。このソダ敷の溝状遺構は一種の暗渠のようで、発掘時にも樹枝を伝って水が浸み出していた。

(二) 浄化槽埋設墳 (第27図)

旧見張所を解体した跡地約三・四メートル×四・〇メートルの範囲内に新しい基礎部として深さ〇・七〇・八メートルを掘削した。古いコンクリートの基礎のほか、断面箱形の素掘り溝に拳大の河原石を充填した暗渠が縦横に走っているのが検出された。この暗渠は、新しいもので、充填された河原石の間は、土の付着がほとんどなく、掘りこまれた黄褐色土には近世以降の陶器片を包含している。

(三) 電柱掘方 (第28図)

駐車場の西北隅に電灯線引込みの柱を立てるために一・二メートル×
〇・九メートルの範囲を深さ一・五メートル掘削した。掘方の底床面近くで、上面が傾斜した水田面と同じ土が認められ、そのうえの土層は、
乱れた層序を呈し、包含遺物は現代のものであるので、最近の盛土と判断された。

管路の掘削においても、特記すべき所見は得られなかった。

(笠野 毅)